

●春日部市民文化講座（第 28 回）

「朝鮮文化と茶の湯 その 2 ー慶長の役と文禄の役の考察、そのとき高山右近はー」

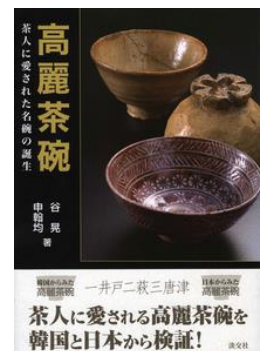
◆日時：2018 年 11 月 28 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■高麗茶碗を追って釜山へ

今日は「朝鮮半島の陶磁器文化と茶の湯を考える ～小西行長の信仰 その時高山右近は～」、前回に引き続きその 2 を話させていただきます。この夏は釜山、対馬、壱岐、名護屋城跡と巡りました。名護屋城を拠点として、秀吉は「文禄の役」を起こしました。日本では「文禄の役」と言っていますが、「壬辰倭乱(イムジンウエラン)」と言われていますし、「慶長の役」は「丁酉再乱(チョンユチュラン)」と言われています。韓国の人たちには「壬辰倭乱」で通じますし、中学生が日本の教育よりも丁寧に教えられていることに驚きました。そうした中で、ぼくが申し上げたいことは、何で韓国の陶磁器文化が、日本の文化として世界に誇れる茶の湯、侘び寂びの千利休の茶の湯の中にごく当たり前のように入ってきているということです。千利休も朝鮮半島の器を知っていましたし、特に徳川幕府になって「高麗茶碗」と呼ばれる器が貴重とされる器になっていったのかということです。

■高麗茶碗

「高麗茶碗」という言い方は日本からみた言い方であって、日本の茶人や商人たちが朝鮮の陶工たちにこういう茶碗を作してほしいと切型(きりかた、お手本)を渡して作ってもらった茶碗なのです。その受け場所が釜山を中心に 2 カ所あったのです。江戸時代になると、それが朝鮮との貿易の中心となり、ぼくたちが呼ぶ「高麗茶碗」というカテゴリーになっていったのです。ぼくは、何で日本の陶芸師だけでなく、朝鮮の陶芸師の助けを必要としたのかと考えたのです。今日のお話で、ぼくはこの点について結論を出しません。ぜひ、皆さんに考えてほしいと思います。日本文化の特徴である利休の侘茶、おもてなしの道具の中で、朝鮮茶碗の美意識、磁器や陶器が非常に愛された訳は何だろうかということを考えてほしいのです。これは、淡交社から出されている「高麗茶碗 茶人に愛された名碗の誕生」という本ですが、ここの写真にある茶碗は、皆さんが博物館や美術館で見てこられたものです。当時の大名や茶人たちがほしがっていたものです。ぼくが茶の湯を習い始めた時に、直ぐにこの高麗茶碗にぶつかりました。そして、見たり触ったりさせてもらった時に、「これはいいなあ」と理屈抜きに思ったのです。今の日本と韓国との状態はちょっとおかしいですね。でも、本来は日本と朝鮮の人たちとの心はどこかで重なる部分があるのですよ。美意識とか何かでは共通している部分があるのです。



■小西行長による宣教師の招聘

「文禄の役」で秀吉の命を受けた小西行長の軍は、釜山に上陸して全羅南道(ぜんらなんどう)と慶尚南道(けいしょうなんどう)という2つの道を辿って漢城(はんじょう)や平壤(ぴょんやん)2 方へ攻め入っていくのですが、結局、この戦いは敗北でした。今、小西行長などが築いた倭城跡が観光地にしようと整備されて残っています。びっくりするほど立派に整備されています。小西行長軍が攻めていった時に、朝鮮半島に初めて宣教師が渡りました。教会史において、朝鮮半島における宣教の第一歩を踏み出したのです。キリシタン大名の小西行長が部下の指揮を鼓舞するために、ミサと礼拝を行ってほしいという要請を行い、宣教師が朝鮮半島に渡りました。それを偲ぶかのように、この遺跡の直ぐそばにカソリックの教会が建てられているのです。立派な教会でした。

■「高麗茶碗」と宗義智

いろいろな意味で朝鮮と日本では人々の意識の違いがあるのに、日本人が「これはいい」とする茶碗を求めてきたのでしょうか。江戸時代になっても、「高麗茶碗」というのは人気があったのです。自分たちの好みの茶碗の形を紙で切って、朝鮮の陶工たちに作らせていたのです。そういう商売をした人たちがいたのです。千利休が活躍した頃は、



城の石垣



天守台跡

【写真は順天倭城跡、「倭城の旅」HP より】



宗義智の肖像画



キリシタン大名小西行長の娘で、対馬の初代藩主だった宗義智に嫁いだマリア夫人とその子どもの霊を祀る今宮若宮神社

堺の商人たちがそういう商売をしていたのですけれども、この「壬辰倭乱」と呼ばれる「文禄・慶長の役」の頃には、博多の商人が力を持ち始めるのです。1600 年を中心にして考えてください。1600 年に関ヶ原の戦いがありました。ここで、さまざまな武将たちの運命が変わるのです。西軍の石田三成や小西行長は、京の六条河原で斬首されるのです。しかし、小西行長の先方として文禄・慶長の役で朝鮮を攻めた対馬のキリシタン大名・宗義智(そう よしとし)は、関ヶ原で西軍にあって小西行長と一緒に戦ったのですが、お構いなしで江戸時代になると高麗茶碗の総支配人になっていくのです。宗義智が徳川時代に残ったのは、文禄・慶長の役のために悪化した朝鮮との関係を修復するように徳川家康から命じられたからなのです。義智は、慶長 14 年(1609 年)に朝鮮との和平条約を成立させました(己酉約条または慶長条約)。この功績を家康から賞され、宗氏は幕府から独立した機関で朝鮮と貿易を行なうことも許されているのです。江戸時代に朝鮮との政治的、商業的窓口になったのが、宗家であり対馬なのです。ぼくらが「高麗茶碗」と呼んでいる茶碗で江戸時代以降のものは、この宗家を通して朝鮮で焼かれた茶碗を言っているのです。

■朝鮮半島の文化や歴史に対する意識の違い

秀吉が朝鮮の人たちにしたさまざまな行動、さらに江戸時代が終わって明治になってからの植民地化政策、そうした中で朝鮮の人たちを日本人と同じようにしようとしていたのです。ですから、朝鮮の人たちの心の傷は癒えていないのです。第二次世界大戦後に起こった北朝鮮の侵攻を、当時、ぼくらは「朝鮮動乱」と呼んでいました。あの「朝鮮動乱」によって戦後の日本経済は立ち直ったのです。そうしたことをもう一度、ぼくたちは認識し直すことが大事じゃないでしょうか。この「高麗茶碗」を好きだなあ、いいなあと思うことは、親しく韓国の文化を受け止めるとともに、今申し上げたようなたまらない歴史的な民族的なギャップがあることを受け止めなければなりません。韓国の一部の知識人は、ぼくが好きな「佗茶」を好きだと言ってくれるのです。こちらが圧倒されるような勢いで迫ってくるのです。1600 年以降、戦いが無くなった江戸時代になって、「高麗茶碗」を対馬の宗家を通して朝鮮半島で焼かせて輸入し、茶の湯に取り込んでいったのです。名護屋城(佐賀県)から軍隊が朝鮮へ行きましたが、「壬辰倭乱」以降は博多商人が力を持って交易を始めるのです。茶会記でも、堺の商人たちから博多の商人たちに移るのです。江戸時代の茶人は博多の人が多く出てきます。

■礼節・尊敬をもって接する

この「壬辰倭乱」の時に、日本に連れて来られた朝鮮の文化人や陶器師たちは、唐津、薩摩、鍋島などの大名によって連れて来られて、日本の茶の湯に大きな貢献を果たしてくれた訳です。ですから、ぼくは茶の湯をやっている人間として、朝鮮・韓国の人たちとはもっと近づいて、礼節・尊敬をもってお付き合いをしていかなければならないと思います。とても暑い中、こういう旅をして来ましたが、お茶をする者として韓国の文化や歴史に対して謙虚な思いというものをつくづく考えさせられています。日本と朝鮮半島の歴史において、平和でお互いが尊敬の念をもって過ごしたのは江戸時代だけなのです。そういうことをぼくたちはしっかりと心に刻んで接していくことが大切だと思います。

■「壬辰倭乱」以降の日本と朝鮮

「壬辰倭乱」は、秀吉によって行われ、小西行長と加藤清正によって侵攻が行われ、戦いが終わっても、対馬から釜山への佗茶のルートができるのです。そして、堺から博多へと商業の中心が変わっていくのです。そんな中に、壱岐という小さい島があります。博多に近い島ですが、平戸藩が治めていました。平戸藩は、長崎県北部の豪族・海賊だった松浦党より台頭した松浦隆信・鎮信親子が豊臣秀吉の九州征伐の折、旧領である北松浦郡・壱岐を安堵され、関ヶ原の戦いで東軍に与して平戸藩 6 万 3 千石の大名になりました。江戸時代になると四代の殿様が家元となり鎮信流という茶道の一派を起こします。三千家とはずいぶん違うお点前ですが、殿様が決めた点前で面白い所作を見ることが出来ます。それが壱岐を支配していた平戸藩の松浦氏なのです。でも、対馬と壱岐では意気が通じません。壱岐で観光の名所になっているのが、弥生文化でとても有名です。対馬はもっと歴史は複雑ですが、宗家がずっと統治していて、朝鮮国と日本国との橋渡しをしていました。

■朝鮮通信使

江戸時代に朝鮮通信使が日本にやってくるのですが、釜山に行くと朝鮮通信使歴史館があります。そこには、徳川幕府と対馬藩がどれだけ手厚くもてなしたかということが展示されています。徳川幕府の時代だけは、朝鮮半島から見て対等で平和な時代が続いたと教えられているのです。本当に僅かな期間だけです。通信使を迎えて江戸に送ったり、無事に帰国したりとする役をしていたのが、宗家であり宗義智だったのです。あまり知られていません。

高橋先生が夏に旅された釜山、対馬、壱岐、そして名護屋城跡に刻まれた歴史を学ばせていただきました。